

大雪山国立公園協力金等検討作業部会【第3回】 議事録

■日時:令和3年12月6日(月)13:30~15:30

■会場:上川町役場大会議室 ※希望者はweb会議システムにより参加

■出席者:43名30団体参加(うち21名18団体ウェブ参加)

■概要

1. 開会

2. 議事

(1)令和3年度白雲岳避難小屋周辺登山道維持管理協力金について

1)「実施内容及び結果報告」

→大雪山国立公園上川地区登山道等維持管理連絡協議会事務局 吉田補佐より説明

【質疑応答】

■NPO法人ひがし大雪自然ガイドセンター 河田氏

- 白雲岳避難小屋周辺登山道維持管理協力金(以下、白雲岳協力金)のノベルティとして手ぬぐいを環境省が提供されたということだが、これにどのぐらい経費がかかったのか。
- 登山道補修業務委託の50万の中に原材料費でヤシネットとかそういうものも含まれていることだが、これは原材料費に反映した方がいいと思う。
- 来年の繰り越し金については、寄付いただいた方の意思に沿うような形で、実際これだけは少なくとも集めてこれだけのことを次年度反映させる、というようなことを考えているのか。

■事務局

ノベルティの手ぬぐいは今年環境省の予算で対応した。1枚当たりの製造コストは197円となっており、4,000枚作成したため、合計額78万8000円、約80万円弱ぐらいの経費となっている。

■上川町役場 吉田氏

- 協力金をお預かりしている状況で、しっかり補修の状況を見せていくことは必要だろうということで、登山道の補修業務としてビジョンの策定とあわせて委託業務にて執行した。
- この協力金については、あくまでも趣旨に沿う形の中で執行するので、来年度以降の取り組みの内容については、今後関係機関との協議により決定することを理解願いたい。

■北海道大学大学院地球環境科学研究院 渡辺氏

- 委託料の内訳について、原材料費・延べ人工数を知りたい。50万円は妥当なのか、安すぎないか。必要な経費は出すべきだと思う。

■ 合同会社北海道山岳整備／一般社団法人大雪山・山守隊 岡崎氏

- 上川町からの登山道補修の委託費約50万円は、8月に入ってから契約し、人を雇って動き出したのが9月頃からであった。50万円の内訳は、概算で20万円を人件費、10万円を資材費、20万円をビジョンの作成（白雲岳周辺の登山道をどのように直していくかを示したもの）に使用した。また作業日数としては、山での整備作業自体は20日弱であったが、それに加えて、荷上げの段取り、荷上げ、整備のための登山道調査や整備箇所の報告のためのまとめ作業、登山道整備イベント2日間を専任の方に依頼した。ほかに、山守隊が登山道整備イベントとして運び上げた資材も使った。
- 今期は協力金の周知の年だと思っており、協力金を使ってどういう作業をするのかを少しでも登山者に見せたいということで、協力金から50万円の確保をお願いした。
- ノベルティの手ぬぐいは人気があり、費用対効果から手拭いはあってもいいと考えているが、ノベルティのためではなく登山道整備に寄付をしてくれるという人を増やしたいと思っている。

■ 北海道大学大学院農学研究院 愛甲氏

- 岡崎氏の話では、自身の持ち出しと小屋管理人の業務の中で行われている部分がかかなり含まれて、この金額と理解している。
- 白雲岳協力金を支払った方々へ、50万円の支出の内訳とそれなりの説明、約270万円を来年度にどういう使い方をするかの予定を含めて、使途について、きちんとした説明、報告がなされないと、次年度以降の協力を得られない可能性がある。内訳表示や来年度の予定を含めて、これから公開されていくことになると思っている。
- 白雲岳協力金に協力した登山者は、協力金による整備の対象区間を明確に認識していたかどうかを質問したい。次年度以降を考える時に、協力金対象区間の設定がどのぐらい必要なのかを含めて検討しなくてはいけないと思っている。

■ 合同会社北海道山岳整備／一般社団法人大雪山・山守隊 岡崎氏

- ほとんどの登山者が整備対象区間を認識していなかった、登山道全般という認識ではないかと思う。

■ (一社)かみふらの十勝岳観光協会 青野氏

- 実際にこの白雲岳の小屋を利用した方の何パーセントぐらいの方が協力したのかを知りたい。
- 今回の協力金収受は管理人が無償で行っていると思うが、白雲岳の避難小屋の管理料を知りたい。
- 環境省で、この協力金を大雪山全体に広めていくことを今後考えているとしたら、どういう計画を考えているのか。現状では、十勝岳方面の小屋は無人であり、ビジターセンターもない、そういった所は今後どう対応するか問題になってくると思う。

■ 合同会社北海道山岳整備／一般社団法人大雪山・山守隊 岡崎氏

- 白雲岳避難小屋を訪れた登山者のうち8割以上の方が協力金を払ってくれている。それ以外の方は、お金を持参していない方もおり、支払いたくてもできない登山者もいた。学生等の登山者に対しては、協力金は金額自由であることを管理人がその都度説明しており、500円での支払いもあったと思う。
- 管理料は日当1万1千円をお願いしており、本州の山小屋管理料が6,500円～8,500円くらいと考えるとかなり高いと思っている。人件費はそのまま管理人に支払っており、会社としての利益は全くない。

■事務局

- 今後これ（協力金）をどういう風に広めていくのかという指摘については、取組方針に関わる議題でもあるので、資料3-1-1の4頁に、4.として、取り組みの進め方という箇所があるので、ここを回答として読みあげたい。

2)「協力金に関する登山者調査の結果について」 →事務局((株)ライヴ環境計画)より説明

■NPO法人ひがし大雪自然ガイドセンター 河田氏

- 回答のグループ数について。普段登山道にいても登山者は単独が圧倒的に多いが、2人というのも多い。夫婦やカップルが多いが、この場合お金の出所が一か所であり、2千円支払うイメージになる。次回以降は、回答選択肢に「2人」というものも設けた方がいいと思う。

■合同会社北海道山岳整備／一般社団法人大雪山・山守隊 岡崎氏

- 協力金の徴収に関わった当時者としてお伝えしたい。初年度で小屋来訪者の6割以上の登山者が協力金について認知しており、支払いの賛同する比率も8割を超えているので、はじめの年としてはよいスタートが切れたのではないかと思う。
- 認知度の設問で、入山前から知っている人と情報源がSNSだった人の割合がほぼ同じであった。今期はテレビや新聞などにも多々取り上げられたが、SNSを利用しない層への周知はこれ以上は難しいと考える。今後は登山口施設や市町村などが連携し、大雪山全体の課題として広報していくことが必要だと考える。
- 登山者の声を反映することも大事だが、大雪山としてこれからどうなっていくべきか将来を見据えた見解を地域として持つべきだと思っている。登山者の声だけで判断すると利用優先の要望になる場合もあり、地域として利用に対する保全をしっかりと考え持続可能な管理を行い、大雪山をどう育てていくかを考えた方針というものを、次に話していければと思う。
- 今回のアンケート結果は非常におもしろいが、小屋来訪者のセルフアンケート(6月から実施されていた分)については、グラフだけでなく記述部分も今後開示されるのか。

■事務局

- 今後、全体の調査結果としてお知らせできると思うが、本日の参考資料2に、6月から実施したアンケート結果の集計が記載されているので、そちらをご覧くださいと思う。

(2)大雪山国立公園における協力金取組方針(修正案)について →事務局より説明

■北海道大学大学院地球環境科学研究院 渡辺氏

- 表現の問題について、「協力金取組方針」は今後公開されるものなので、表現について気をつけたほうがよいのではないかと。資料3-1-1の1頁「2.大雪山国立公園において協力金の取組を行う意義」の内容で「国立公園の管理運営への利用者の参加を推進する。」「協力金の取組は、利用者が国立公園の管理運営に参加する重要な方法の1つとして位置付ける。」の内容は問題ないが、協力金の支払いをしているから勝手に管理運営をしてもいいと誤解されないか懸念があり、表現を工夫した方がよいのではと思った。
- 資料3-1-1の4・5・9頁の「協力金の取組の進め方」、「取組を実施する際の共通事項」、「大雪山国立公園連絡協議会の役割」について、いつまでに実施するのか示されていないことが気になった。何年間でやる想定なのか、10年かけてやることではないと思うので、いつまでに実施するかをもう少し具体的に書き込めると、もっと良いと思った。
- 11頁の用途に関する情報提供では、必要性を訴えるだけでなく、登山道補修をすると侵食がこれだけ軽減される、場合によっては侵食が止まるというメリットを説明することで、より支払いへの理解協力が得られるようになるのではないかと。それに関してのデータは提供できるので、これらを積極的に使って、登山者が理解することによって気持ちよく協力できるようにしていくのがよいと思う。

■事務局

- この取組方針に基づいて、いつまでに何をどう進めるのか、という具体の部分だが、今回の協力金等検討作業部会ではなく別の場で検討していく予定である。方針を決めるためのこの作業部会は、こういった全体の方針をしっかりと考えて整理したことで、一定の役割を終えている。表と東の2つの登山道維持管理部会で検討するかどうか、それも含めて検討が必要であるが、登山道維持を進めながら協力金をどのように運用するか、行動計画、あるいはロードマップを別の場で検討していきたいと考えている。

■合同会社北海道山岳整備／一般社団法人大雪山・山守隊 岡崎氏

- 取組方針については今後も様々な意見が出てくるだろうと思っている。登山者からの意見があった入城料として徴収すると、他地域の事例では、登山口への人員配置等によって人件費などに費用がかかってしまい、現場の整備部分へ資金が回ってこないという話がある。大雪山では費用少なく現状で可能な協力金という形で進めていき、協力してくれる人を増やすという登山者全体の雰囲気を作っていくことが必要だと考える。もっと言えば、国立公園は非常に価値があるものだということ認識していただく雰囲気を作るという点では、現時点では入山料よりも協力金の方が望ましいと思っている。
- 今回は白雲岳で試行的に実施し、白雲での協力金事例を作るということで実施した。白雲岳は小屋があるため人が集まり協力金を集めることができる。北海岳山頂から高根ヶ原分岐の範囲を整備するという目的で集めたため、この範囲でしかお金を使うことができないが、大雪山の登山道は300キロ以上あり荒廃が進んでいるところも多く、人が集まらない区間をどうするかという課題も見えている。今後いろいろな地域で協力金を実施したいという声もあがり、協力金の取組が広まるのはよいとしても、登山者が少ない区間は整備できないという課題が出てくる。お金を収受できる手段・場所というのは限られるので、その限られた場所のお金を大雪山全域の整備に回していくというシステムは、これから必要になってくると思う。これには、市町村を超えた連携が必要であると思うので、そのことがどこかに明記されているといいと思う

た。

- 白雲岳避難小屋で集まった協力金も、ヒグマ情報センターで集まった協力金も（今年度73万円程度の協力金が集まった）、その一部は大雪山全域で使えるようにしていくことが必要だと考えている。このような取組をするためには市町村を超えた管理団体の存在も必要になってくるのではないかと。長期の方針としては、そのような行政と民間をつなぐ中間組織も取り入れて、各市町村と民間が連携し協力することで、自分たちの地域の登山道も直せることを認識してもらおう。そうした協力体制というものが必要になると思っている。

■事務局

- 今のご意見は、4頁の「4. 協力金の取組の進め方」の内容に近いと思う。現在の記述としては、「複数の取り組みができた場合」と書いてあるが、白雲岳ですでに協力金が始まり、その白雲岳から上川地区全体や市町村をまたぐエリアについても連携を考えるべきと理解した。上川町とも相談をして、伝わりやすい、一歩踏み込んでの表現になればと思っている。

■北海道大学大学院農学研究院 愛甲氏

- 広域的な連携をめざすのであれば、現状の既にいただいている協力金も無視できないと思う。資料3-1-1の「1. 位置づけ」の解説の①の2段落目に、「既に実施されている施設の維持管理などのための協力金については、本取組方針の対象とはしない」とあるが、この箇所は必要か。将来的に連携していくことをめざすのであれば、そのことをうまく書き込めないか。現状において連携することが簡単ではないことは承知しているが、うまく整理できればと思った。
- 登山者の目線で考えると、大雪山は一括りの認識であり、登山口・トイレ・小屋などでさらにはエリアごとに支払う、そのたびに協議会や市町村が違うという説明があっても複数あるとしても分かりづらく、混乱する。
- 既に実施されている協力金を聖域化してしまうのはどうなのか。そういった議論は必要ないのかということの問題提起させていただいた。

■北海道大学大学院地球環境科学研究院 渡辺氏

- 私も愛甲先生と同じ意見で、「既に実施されている・・・」の箇所は必要ないと思う。

既存の協力金もこれから実施していくものも、広域での一元化がなければ登山者にとっては払う場所・収受された資金が利用される場所・会計が異なっても理解できないし、支払ったお金がどこでどのように使われているのかがわからなくなる。協力金の数が増えるほど資金の流れを把握することが難しくなり、登山者が協力する（支払う）ことにブレーキがかかってしまうのではないかと。それは既存の協力金にもこれからの取組にもマイナスの影響しかない。全部の取組がうまく機能するためには調整役や広域で連携できる受け皿（組織・団体）が必要であり、一元化した方が登山者にはわかりやすく、協力金に対する理解も得られやすいのではないかと。そのような役割を担う組織を早急に準備していく必要があると思う。

■事務局

- 既に実施されている協力金についても、この取組方針の考え方をもとに進めていただくのが望ましいというところが一番重要な部分だと思っている。読み方によって矛盾が生ずることは混乱の原因になるので、この「本取組方針の対象とはしない」の箇所を削除するという一方で、修正をさせていただきたい。
- 協力金取組方針の修正案については、ご指摘の箇所を修正した後、次回総会に報告したい。

3. その他

■北海道上川総合振興局環境生活課 福井氏

- 協力金に関連して現在調整している事項があるので共有したい。東川町エリアにある裾合平の荒廃した木道の整備の一部を、ガバメントクラウドファンディング（北海道がおこなうクラウドファンディング）で実施できないか調整を進めている。実際に実現するか不透明なところはあるが、継続的に毎年やるということは今のところ考えてはいない。まず1回やってみて登山者を含めいろいろな方々に今大雪山で起きている問題を知っていただくツールとして試行的にできないかということで検討している段階である。

■北海道大学大学院農学研究院 愛甲氏

- 青野氏から、大雪山の避難小屋は管理人がいない場所が多いという指摘があったが、そのような場所で協力金を収受している事例を紹介したい。
- 今年の令和3年9月18日～10月18日の期間の北アルプス登山道等維持連絡協議会の事例で、北アルプス槍・穂高連峰や常念山脈の登山客から寄付金という形で協力金を試行的に集める検証を実施しており、紅葉時期で人気の箇所ということもあり1ヵ月で約2,100件、金額にして541万円ほど集まった。収受方法は現地に訪れていない人も寄付できるクレジットカード決済や銀行口座振込を準備し、登山口や山小屋などにQRコード付きの看板やチラシの設置、名刺型のカードの配布等を行い、専用のウェブサイト（北アルプストレイルプログラム）から振込等を行う形である。中には高額な寄付をされた方もおり、寄付件数に対してかなり多い金額の寄付金が集まったということである。結果から登山口には電波がない場所もあり、登山口以外の場所、帰ってから自宅等で支払っている件数も多く、この結果からは登山口に箱を置く必要はないため大雪山でも参考になる結果であると感じた。人が収受するよりは集まりは悪いかもしいが、そのようなやり方もある。もっと詳しい内容は今週末に会議が予定されておりそこで案内されるのでまたお知らせしたい。

■合同会社北海道山岳整備／一般社団法人大雪山・山守隊 岡崎氏

- 今年は、白雲岳協力金の認知向上に非常に力を入れ、認知向上の対策をするために上川町（上川地区登山道等維持管理連絡協議会）から35万円ほど周知委託料として確保いただき実施した。来年もまた同じく協力金開始の周知をしようまくいくとは考えておらず、今後は、いかにして協力金を使い成果をだせるかだと思ふ。このため、来年も管理をやらせていただけるのであれば、登山道整備を見せるという部分に力を入れたいと個人的には考えている。
- 協力金は、今年は約268万円集まった他、振り込みで100万円の協力をしてくれた個人もおり、今後もこう言った寄付が増えていくのではと思っている。アウトドア企業、例えば上川町であればコロンビア。ノースフェイスも様々な地域で登山道整備という形の連携を始めており、他のアウトドア企業も登山道の管理というところに目を向け始めてきた。いろいろな企業が登山道にお金を出したがつているという情報も得ている。これらに対してしっかり整備結果を見せしていくと協力金の認知度も飛躍的に伸びるのではないかと考えている。
- 先ほど愛甲先生・渡辺先生から登山道整備の金額が安すぎるのではないかと話があったが、確かに公共工事と比べると安い金額である。現状で実施している質の高い作業を金額に換算するとかなり高い金額になってしまうため、現時点でそれを求めると、登山道整備を広めていくのが難しくなってしまうと思っている。公共工事のような莫大なお金をかけずとも精度が高く費用を抑えた手法を作っていくことは重要。また、登山道整備や保全に携わる人々の生活の安定は考えなければならないことと認識している。特に大雪山は実働期間が3ヵ月ほどしかなく、技術の継続・向上が難しい条件にある。同じ人に継続して担当してもらい知見を深めてもらうということが必要で、来期も実施できるのであれば人づくりという方向にも力を入れていければと考えている。

4. 閉会